

深浦円覚寺古典籍保存調査プロジェクト成果報告会・所感

— ZoomによるWeb開催に参加して —

弘前大学大学院人文科学研究科修士課程一年 楠 美 佳 奈

この度、ZoomアプリによるWeb視聴という形で報告会に参加させていただきました。大学の講義や公開講座等のオンライン配信が一般化しつつありますが、今回の開催には、渡辺麻里子先生をはじめとする皆様の大変なご尽力があったことと拝察致します。

今年度は新型コロナウイルス流行の影響により、深浦町民の皆様および弘前大学の学生は調査への参加ができませんでした。青森県民として、また、ここ津軽の地で日本史を学ぶ学生として、地域の古典籍の調査に直接関わる貴重な機会を失ってしまったことは、大変残念に思います。願わくは、来年は町民参加型の調査が再開されることを祈るばかりです。

しかし、このような状況下でも、Web配信という形で成果報告を拝聴する機会を得たことは、非常に意義のあることだと感じています。このプロジェクトに参加しているみなさんが、研究・学習を継続するという点においても、この形式は画期的な良い役割を果たしたのではないでしょう。

津軽地方の西海岸一帯は、安藤氏による十三湊の発展に加え、江戸時代を通して北前船の寄港地であったことなどからもわかるように、海路を通じて様々な地域とやりとりをしていました。その中でも文化や政治の中心地であった京都との関係は、特に注目すべきものがあると思います。陸路とは違った形で形成される文化圏において、京都と距離が遠いながらも、その宗教文化を受容する重要な拠点としての役割を、深浦円覚寺は担っていました。それは残存する史料群から見出すことができま

す。また、津軽は一代様信仰やオシラサマ信仰、観音講・地藏講・地蔵ごとの百万遍念仏など、その暮らしや年中行事の中に信仰が深く根付いている土地でもあります。地域の中において、信仰の核となった寺院に多くの古典籍が残っていることは、それだけで特別な意味のあることのように思われます。

深浦円覚寺は青森県内有数の歴史ある寺院であるにも関わらず、その変遷や所蔵されている文化財等は、県民にほぼ知られていないといっても過言ではないように感じられます。私自身、弘前大学で所蔵資料の調査が行われているということを耳にするまでは、どのような来歴を持つ寺院であるのか、どういった古典籍が眠っているのかさえ全く知りませんでした。今回の報告会で、プロジェクトの概要と、二〇一七年からの調査の過程やその現状を併せて知ることができたため、地域史料への関心がより一層高まりました。

また、調査報告および特別講演において、中近世から近代に至るまでの歴史の流れの中における深浦円覚寺と、それを取り巻く津軽地方一円の宗教世界の位置付けを知ることができました。これは、地元の歴史が日本の通史という大きな流れの中にどう結びつくのかということを知る上でも、大変に意義深いものであったと思います。特に、中近世における醍醐寺との関係は、京都と津軽という遠く離れた地をつなぐ重要なものであり、宗教的ネットワークの構築という点から見ても、興味深かったです。また、国内の宗教界が大きく変容した幕末・明治期の深浦円覚寺の活動については、初めて知ることが多く、驚いた点も少なくありま

せんでした。特に、海浦義観の活動については、目を見張るものがあります。

今回は会場で例年通りの開催というわけではありませんでした。しかし、オンラインでフォーラムが行われたことによって、初めて参加した私自身、地域の史料をより身近に感じることができました。これからも地元の歴史を意識しつつ、機会に恵まれることがあれば、地域の古典籍の保存調査活動に積極的に関わってゆきたいと考えています。